

# 私の保育

私の保育の出発点は、子どもとの「出会い」であって、その出会った場で、子どもも保育者も、借り物ではない、真の生活をくりひろげていくことが、保育の根本の姿であろうと考えて、保育者としての第一歩をふみ出した。

入園式前は、名簿をつくったり、下駄箱に名前をはったりして、まだ見ぬ子どもたちの姿を想像しながら、子どもたちを迎える準備をした。保育室がきまり、それぞれの自由画帳やクレヨンが、それぞれの棚にはいり、遊び道具もへやの中におさまってはいるが、子どもが来る前の保育室は、全く動きがなく、かたい感じがしていた。

入園式前日になると、とても不安であった。しかし、もうあ

## 秋間直美



すには、三十九人の子どもがやってくる。私は、もう一人の先生と二人で、この三十九人の組をうけもつことになっていた。その時の私は、いわゆる保育の技術というものはもっていない、ただ、子どもと私の、人と人との出会いを信じるものであった。そして、私の保育日誌の第一ページには「保育にあたって」として「① 子どもが生き生きと活動することを旨とする。保育の形態にはとらわれず、その時、その時、自分の心の底からしみ出してくる形態を実行していこう。② 一人一人の成長がとらえられるように、保育の準備と反省をきちんと記録していこう」と書いてある。実際の保育に足をふみ入れるにあたって、これだけが、私の心の準備であった。

入園式の日は、母親がいっしょなので、子どもと保育者だけが直接にふれあう時間はほんの少しであった。しかし、私自身、保育者である自分というものが、はっきり意識されていなかった。なので、その少しの時間も、何ともぎこちない時間であった。

入園式は、四月十四日であったが、翌日の四月十五日は、子どもと保育者だけの幼稚園での生活が始まった日である。へやの中に何人か立ったままの子がいる。ずっと、泣いている子どももいる。自分なりの方法で、幼稚園という場を、いろいろなふうにさぐってみている子どももいる。私にとって、三十九人はその何倍もの人数に感じられる。そして、入園からの数日は、立っている子、ほかの子のすることを見ている子などに、次々と声をかけてまわることで保育時間が終わっていた。帰りの仕度へやに全員を集めるのも容易なことではなかった。このように、私自身、保育時間中には、全くわけがわからなくなつて、子どものおいかけつこのような状態であったので、一人一人の子どもなどのことなど、見えてこなかった。一人一人の子どもが見えていないということにも気づかず、過ぎる毎日であった。

ある男の子は、入園以来、へやでだまって立っていたり、こしかけたままでいる子であったが、五日めの帰り近くに「先生、

つままない」と言いに来た。つまらないから、つままないと言ったので、喜ぶべきことではないが、私のところまでこれを言いに来たことに感激した。毎日、だまって見ているだけであったが、この子の心は、少しずつ幼稚園や保育者に向いてきていたのだなと思った。一人一人の子どものことを考え、よく見るということとは、一歩さがって冷静に考えれば、保育者としてあたりまえのことだが、実際の、毎日毎日の保育に夢中になっていて、この子の、この言葉を聞くまで、気づかなかつた私である。

新米の保育者ゆえであろうか、子どもたちが幼稚園という場になれてくるにしたがつて、私も、ただ夢中という時期から、少し余裕をもって、子どもたちのことや、保育のことを考えられるように変化した。余裕といつてもほんの少しの余裕である。五月の初めのころであったが、このころ、ただただ夢中ですこした自分の保育を考えて、「これでいいのだろうか」という不安が生じてきた。

この不安は、今になって考えると、保育の根本的な問題としては意味のない不安であったようだ。なぜなら、何か、急いでクラスのまとまりをつけることなどに目が向きがちになって、形態にとらわれずに始めたはずなのに、形を求めたためにおこ

ってきた不安であったからである。そこで、倉橋先生の『幼稚園真諦』をはじめ、保育についてのさまざまな本を読んでみたり、学生時代に、お茶の水女子大学附属幼稚園でとった観察記録や、その時考えていたことなどを読みかえしてみた。そして、保育は実践が第一であって、本から始まるものではないが、本を読むことによって、実践が新たなものになるという経験をした。実践は、あまりにも現実的すぎて、必ずしも、真なるもの、そのものの姿があらわれているとはいえないように思う。もちろん、本を読んだことだけで、不安が全くなくなつたわけではないが、気がついてみると、もう子どもたちの間には、いくつかの、友だちのつながりもできている時で、私も前へ前へと進まざるを得なかつた。

ここで、友だちのつながりに関して、三か月間を概観してみよう。入園して三日めに、早くも一対一の二人のつながりというのが、いくつかできた。その一つの例をみてみる。

N夫は、朝からへやのある所に立ったままだった。そこへY子が近づいてきて、N夫のひたいに自分のひたいをくっつける。N夫はとまどつたようすをしているが、Y子はかまわず手をN夫の肩にかけたり、だきかかえるようにしたりする。そのうちN夫も安心したようすになり、この日は、一日いっしょに遊ん

でいた。このころの友だちのつながりは、この例のような場合とか、同じくつをはいていることに偶然気がついたとか、同じ遊具で遊んでいたということ、とても簡単に友だちになって、その日一日いっしょに過ごす、次の日は、また新たにつながるチャンスがなければ、つながりができないという、単発的ともいえるものであった。やがて、継続的な、そして、とても親密でしっかりとした友だち関係もできてくる。そのつながりは、とても強固で、一時は、組の中がそのようなつながりの単位で分解してしまつたようにみえて、心配になつた。しかし、それがいつのまにか、ほかの子の出入りも許すようになってきて、もう一度、友だちのつながりの組み替えがおこる時期があつた。その後は、同じ組というつながりが、どの子にもはっきりわかつてきて、どの友だちとでも安心して遊べるようになっていく。

私の組の子どもたちが、毎日、とても好んでする遊びは、ねんど、ブランコ、砂場遊びなどである。ねんどは、各自、ケースに入れてもっているが、最初は、ケースから少しだけちぎつていたのに、しだいにたくさんのかたまりをいじるようになり、平らにして、表面に線をつけて「チョコレート」と言つては、保育者に食べさせる活動がさかんになった。そして、ねんどをこねる手に、とても力がはいるようになって、今でも、毎日ど

こかで、新しく工夫されつつ、ねんどのごちそうや、ねんどの動物などが作られている。

ブランコやすべり台や鉄棒などは、それがあるだけで、どうして、あれほどに子どもの成長を助けるのかと、ふしぎに思われるほどである。Tは、ブランコが好きで、毎日毎日のついでに、六月の中ごろのある日、「一生懸命こいだら、いっぱいこげた」と目を輝やかせて言いきた。その次の日も「うんとこげろ」と言っていて、とてもうれしそうにのついでいた。それから、毎日毎日、ブランコを楽しみに幼稚園に来るようになった。

またKは、幼稚園に二つあるすべり台の大きな方は、入園してから、まだすべったことがなかった。本人は、こわいと感じていたようだった。やはり六月の中ごろのある日、Kは、その大きな方のすべり台をすべることができて、その日、とても喜んでいたら、その後、毎日そのすべり台をすべっていた。そしてこのことが、Kのほかの行動にもとてもよい影響を与えていて、からだの動きがしっかりしてきた。どうしてこれほどの魅力が、これらの遊具にはあるのだろうかと思つて、私も、子どもたちといっしょにブランコやすべり台にのつてみた。自分のからだは空中で動いて、足で歩いていたのでは感じられないような空気の動きや、からだの感覚があるようだった。

砂場の遊びは、山を作ったり、トンネルを掘ったり、道路を作つて、木片の自動車を走らせたり、砂のプリンやアイスクリームを作ることが多い。それから、おとし穴にも私は何度もおとされた。砂場は、藤棚の下にあつて、日かげになっているので、とてもおちついていられるようだ。六月も末になって、夏のように暑い日に、砂場で初めてはだしを経験させてみた。くつをぬぐまではおそろおそろしている子も、ひとたびはだしになると、表情も動きもとても自由になるようだった。そして、日なたの砂のあたたかさや、日陰の砂のひやりとした快さを感じとっていた。また、いつもよりも砂場におちつく子が多く、友だちのつながりも、自由で広がったようだった。私もはだしになってみると、とても素直に子どもたちとのつながりができ、自分の動きも自由になって、何でもないのでうれしさがこみあげてきた。この日は、保育が半日の日で、特別にジャガイモのおやつが出た。はだしの足を洗つて、へやにはいって、みんなでこれを食べた。私の勝手な判断かもしれないが、はだしや、ゆでたままのジャガイモを手にもつてかじるという経験は、原始に帰つたような、そして本当の人間に帰つたような、貴重な経験であつたと思う。

このようなさまざまな経験を子どもといっしょにしなからす

ごしてきて、早くも夏休みを迎えようとしている。子どもにとって、すべてのことが初めてであると同じように、私にとっても、すべてのことが初めてである。最初のころは、初めての経験に対して、まず第一に不安があった。子どもたちはもつと不安であろうと思って、私なりに、自分の不安はカバーして対処してきたつもりだった。

ところが、五月初めのある日、次のようなことがあった。いつも、十時ごろに庭で「ハトボツボ体操」を園全体でするので、この日は、晴れているのに、十時になっても体操のレコードがならない。前日の雨で庭がぬかっているのです、その日は体操ができないのだが、それに気づかない私は「きょうは、体操はないのかな」と一人ごとを言った。すると近くにいたMがそれをきいて「先生は心配ばかりしている」と言った。この時、不安を表面上の何かでカバーすることなどできないのだと気づき、不安は、不安としてあらわした方がよいのではないかと思つた。五月になっても、六月になっても、次から次へと新しい経験がおこってくる。それに対して、不安で、まず泣いてから対処していた子も、泣かずに新しいことに向かえるようになったころ、私も、少しおちついて、新しい経験に向かうことができるようになっていた。

そして、その日、その日の保育において気づかう点をメモしたのを見てみると、最初は、どの子も安定して遊べるように、ということであった。それが、遊びや保育者を通して子どもをつながりをつくるという点に変わり、やがて、保育者は少ししりぞいて、子どもだけのつながりや、子ども同志の問題の解決を見守るという点に、移り変わりつつある。これは、実際のこともたちの動きがこうさせたのである。

今、もう一度、五月初めごろにもつた自分の保育への不安、疑問を考えなおしてみても、あの時、形をつくることを急がなくてよかつたと思つている。六月の出席カードの通信欄に、一人一人のことを書くために、保育日誌を読みかえしてみると、六月、一ヶ月の間に、一人一人の子の驚くような、幼稚園生活での成長が見られる。そして、今は、それぞれの子が、自信をもって、しっかりとした足どりで幼稚園生活をしているように思われる。このことを見て、本当に待つてよかつたと思う。いろいろなところで、子どもに時間と空間を与えることの重要さがいわれている。私も、遊びが、単に、何かからの解放の時間になつてはいけない、遊びを生活とするためには、遊びに時間をかけなければならぬと自分に言いきかせて、長い時間の単位で考えるようにしてきた。そのために、私は「時間の保障屋さ

ん」でしかなかった点もあると反省している。

まだまだ、保育のことは、考えても、考えても、わからないことだらけで「どうしたらよいのか」「これでよいのか」という疑問は、次々におこってくるだろうと思う。それに、私がここに書いてきた三か月間の経験も、好ましい保育のあらわれであるとは言えない。いや、足りない面がたくさんあることは確かである。しかし、私という人間が精一杯に考え、実践してきたことである。これからも、人と人との出会いと、その場での真剣な人間の触れあいを信じるのが、私の保育のよりどころであるだろう。

「幼稚園は、おもしろいですか」と言われて、ただ「おもしろいです」と答えることは、今の私にはできない。保育場面は「おもしろいです」などというには、あまりにきびしい場であると感している。そして、このきびしさに直面するところに、人間と人間の本当の触れあいがあるだろうと思う。

ここまで書いてきて、私自身、いろいろなことがあったのだなと驚いているしである。毎日の保育はなにかいそがしくおわれるように過ぎていくので、一歩さがって考えてみるということが、とても困難である。そしてその当座は、悩みとして

感じるものが、たくさんあったのに、もう一度、ふり返って考える時には、子どもの生きた動きや成長が見えてきて、悩みであったはずのことが、悩みとして感じられなくなっている。こんな感じを抱きながら、そして、これからの私の保育への不安を抱きながら、この文を書いてきた。

(足利市・友愛幼稚園)

